

戦後教育改革期の「教育評価」に関する研究：全人格的な評価における「教育測定」の役割とその変化

松本，和寿

<https://hdl.handle.net/2324/4784717>

出版情報：九州大学，2021，博士（教育学），論文博士
バージョン：
権利関係：

氏 名	松 本 和 寿		
論 文 名	戦後教育改革期の「教育評価」に関する研究 —全人格的な評価における「教育測定」の役割とその変化—		
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授 木 村 政 伸
	副 査	九州大学	教 授 木 村 拓 也
	副 査	九州大学	准教授 江 口 潔
	副 査	九州大学	准教授 伊 藤 崇 達

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、戦後教育改革期、指導と評価の一体化を目指した「教育評価」において、児童らの特性を把握する方法として用いられた「教育測定」の役割とその変化を明らかにすることを目的としている。本論で明らかにされた第一は、戦後教育の新たな理念の下、客観的な根拠に基づく評価のために教育現場は5段階相対評価などの「教育測定」を積極的に受容したことである。第二は、その過程で学力としての態度を客観テストで把握する技術的な困難と、ガイダンスにおける観察や記録の実施など教員の多忙という困難が生じたことである。第三は、その結果、態度の評価は「教育評価」の中心的な課題から外されたことである。以上のように本論は、1951年版の学習指導要領が全人格的な経験主義教育を標榜する一方、評価は測定可能な学力や領域に焦点化され、後の「教育測定」批判に至ることを明らかにした。よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。